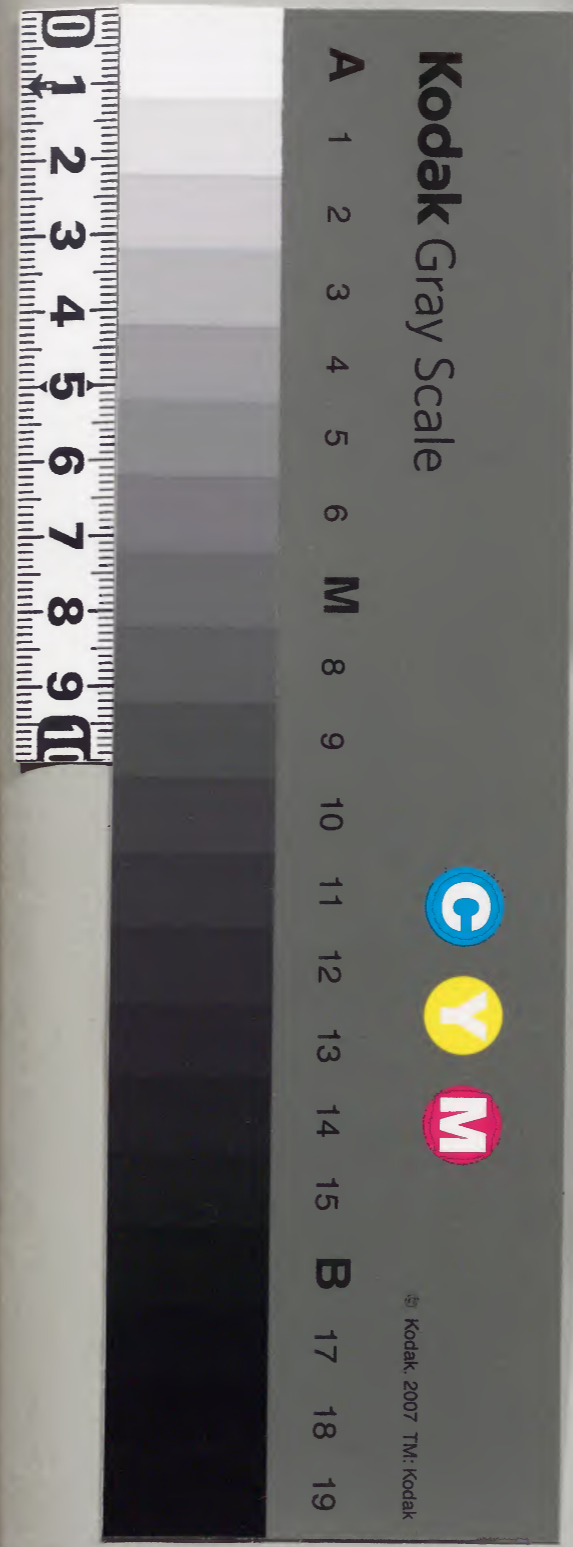


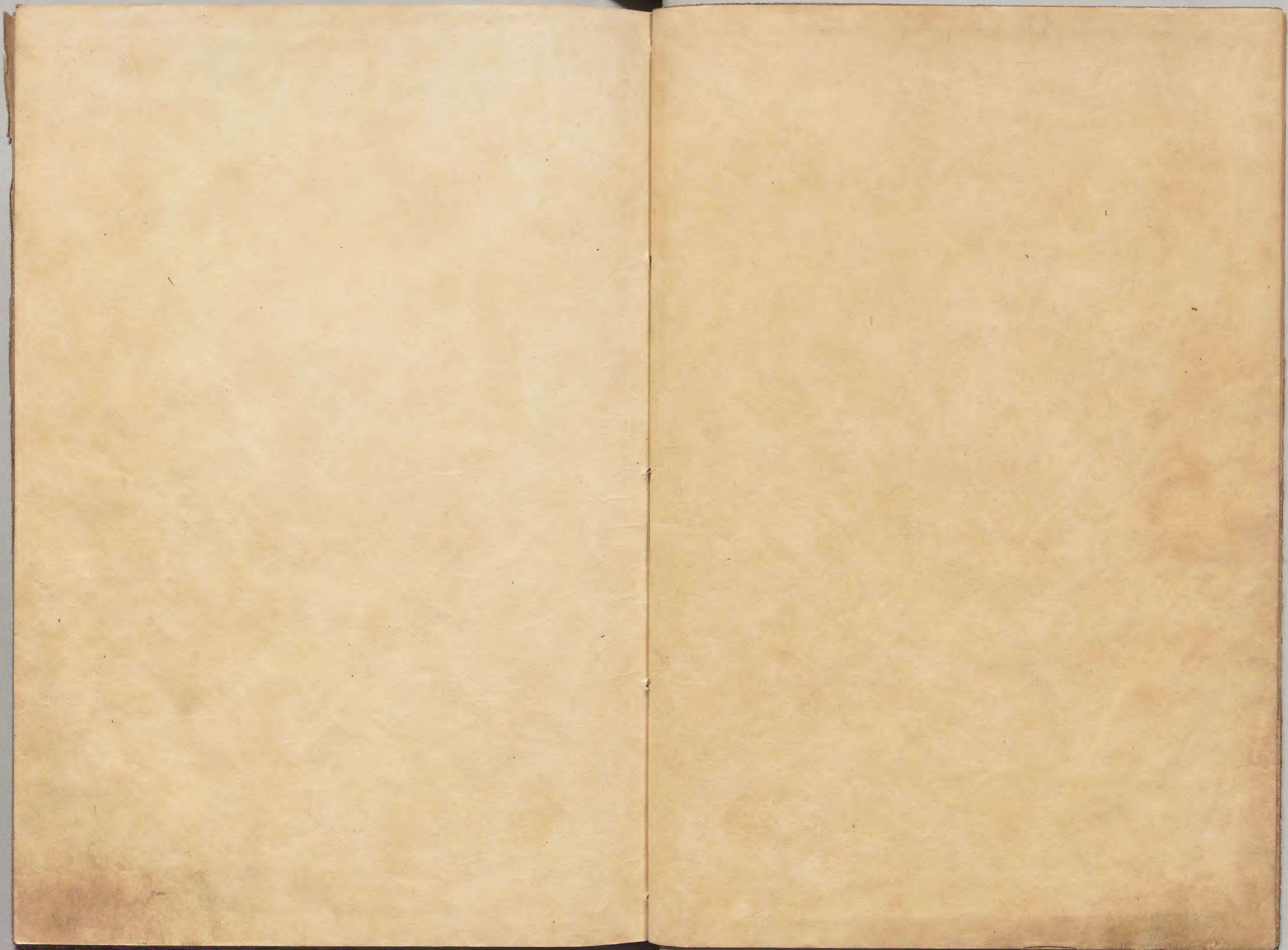
18

元永諸家譜

清和源氏乙五冊之内
義家流之内足利流

| | | | |
|------|------------|-------|---|
| 内閣文庫 | | | |
| 番號 | 和 | 20199 | |
| 冊數 | 186 (18) | | |
| 函號 | 特 | 76 | 1 |





板倉

花房

荒川

寛永諸家系圖傳

清和源氏

義家流

足利流

板倉

乙丑

淺草文庫

● 泰氏 ヤトウシ

足利宮内少輔 くまのり

義顯 よしのぶ

板倉次郎 いとう じろう

淡川少輔次郎 ふか川 しょうぼう じろう

母ハ小糸為時がむすめ はなこ ねの ためとき が むすめ

義春 よしのぶ

淡川次郎三郎 ふか川 じろう ざぶろう

母ハ小糸為時がむすめ はなこ ねの ためとき が むすめ

貞頼 さだより

彦三郎 ひこ ざぶろう

兵部左衛門 へいぶ ざえもん

母ハ小糸時廣がむすめ はなこ ねの ときひろ が むすめ

義季 よしのぶ

淡川又三郎 ふか川 また ざぶろう

刑部左衛門 けいぶ ざえもん

後云佐下 ごいご しかげ

建武二年七月相模次郎小糸時行謀叛と けんぶ 2ね 7がつ さがみの じろう 小糸 ときゆき 謀叛 と

起一五万騎と門わき道舎とせりて おこし 5まん 騎 と 門わき 道舎 と せりて

信列より出法と義季小山判官秀躬と曰
く武列より是とせざるはと合戦
利なきは四月二十七日義季同團女親
系よむわく自害秀躬も又自殺と

直頼

中務左輔

義行

左衛門尉

滿頼

義亮

左衛門將監

左衛門尉

以後三代
中法欽

頼重

板倉八右衛門

法名清房

冬列額田郡小美村より

好重

八右衛門尉

松平大炊御好京より

永祿四年四月十五日西冬河東桑の城と
同長良小太わく合戦の時好京と同
て討死 四十二歳 法名源光

忠重

本工右衛門尉

東照大権現遠列天神の城とせめ給ふとき
忠重もんで城色よとりたらしめり歌の
うらひ民者よあふその老塔の中になら

へーと忠重といけく塔のうらりそとら
とら

大権現遠列小山の城とせめたまふ時忠重松平
大炊助家忠よまろぐひく先陣よとらこ
首一級と得たり

天正十二年長久合戦の時酒井左衛門尉
松平大炊助と相中ふく士卒又十騎と
えろむくひうに敵軍の袴とらりし
忠重其中よらうて敵向と去とおとせ

ゆふよおろんで忠重まろくひて味はれ
物はかろく川とれ

寛永三年三月朔日病死 八十三歳

法名一光

勝重

板倉四郎右衛門 伊賀守

神八流川と称号ともほよ板倉とあだむ

幼少の時剃髪して僧とたれ合身定重

遠別言天神あそく戦死の後

大権現の命により還俗して

大権現よけ之こそまろく駿府の所をりまろ

大権現園東八列と領ト移ふ時江戸の町

奉行とたれ

園原合戦の後天下統一統の時

大権現の作ふより京都の西司代とたれ

文長八年後五位下と叙し伊賀守と

号と

同十九年大坂陣の時 滯入洛以前迄も

の人教大坂よ分急せしと勝重陣場と少佐
して是とよりほくは付少花入の八本
五万石大坂よあり勝重使者二人と大坂よ
はうり大坂修理御田よ示よいしをふハ
大坂不取の事ありなるにうりて今合戦よ
及ぶ船是は少花入の米五万石を此小
あり新堀の用とて是とよりんせハ
とまりらりすす一とては是とよりんせハ
をさよあどはあどとては修理を示

と事一は城中糧米おりたくりはじのる
件の米あり共おとせしとよりより
勝重色取の船頭とはうり奉行ともう一
どして是と運送せしは示は早川に
よりりて大坂より付至法着の去古等
是とよりきりてむ勝重是とよりひく船
と修理を示よはうりていひまらハおあよ
物とれとよりんぐお遠よりや船とて是
城中去糧のたよりとて人と思は是とは

定重

子守屋一修理五采庭より城守より是とぞ
ゆんと小あわじとてとつら書状と川口の事
あよほつり子勝重が形勝は状と物と早川
はよつり番の老よ是と志めして五万石乃
兵糧事あるく伏見よ是と
元和九年後四位下に叙し物故は是と
寛永元々四月二十九日京都より卒と
年八十 道号樂山 法名源英

春苑

松平直政助家忠より属と

大指現遠列言天祚の城とせあたまふ時定重
之陣よ是とんで城下より戦死二十八歳
法名知白

重宗

月守

長十年後五位下より叙と

元和六年ろくねん父膳重隆ちかたか后のち京都きょうとのふりか代だい
中なかがなかれ

日九年にっくねん后のち四位下よんゐののち叙ぎ一ひとののち后のちよよ叙ぎ

重昌ちかまさ

内膳うちだん正ただ

文長十年ぶんちやうじゅうねん后のち五位下ごゐののち叙ぎ

寛永十六年くわんえいじゅうろくにんねん正月朔日しげつしやくにち上使かみつかひととて肥前国ひぜんのくに

有馬ありまよよありむき討死うらト

重矩ちかのり

之水みづ依よ

寛永十一年くわんえいじゅういちねん十二月じふにがつ后のち五位下ごゐののち叙ぎ

重直ちかちか

甚おと右みぎ郎らう

女子むすめ

小笠原おがさわら左馬さま依よ政信まさのぶののち妻めかけ

重六 しげむ

東市正 いちりのけい

寛永十二年 けんえいじふにねん

石出されて遊習と成つて いしだされてあそびと成つて

伊藤番とつとむ いとうばんとつとむ

同十三年十二月二十八日伊切半次を領と どうじふねんじふにがつにじふはちにちいせきはんじをりやうと

同十五年十二月後五位下と叙と どうじふごねんじふにがつごご位げとじゆと

同十九年三月十二日知り子石とたまらる どうじふくねんさんがつにじふにちしりこいしとたまらる

て湯かり枕頭となす てゆかりまくらとなす

女子 にょし

とぶのえん とぶのえん 一い いち ちう ちう まき まき め め
之田平光政が妻 ののたへいみつまさのつま

女子

河村長次郎 かわむらなかじらう 重久 しげひさ が妻 がつま

女子

酒山 さかやま 之 の 清尉 しみずゑい 直政 なおまさ が妻 がつま

重卿 しげきやう

阿波守 あはのり

寛永十二年十二月後五位下と叙と けんえいじふにねんじふにがつごご位げとじゆと

重政 まげ

次郎右衛門尉

女子 にょし

りんだい なる因幡守利長が妻

女子

おろし 大田備中守資宗が妻

女子

えんごう 遠藤但馬守慶利が妻

女子

いんごう 内藤百助正勝が妻

女子

もりがわ 森川木沢重政が妻

女子

まつな 松平丹波守光重が妻

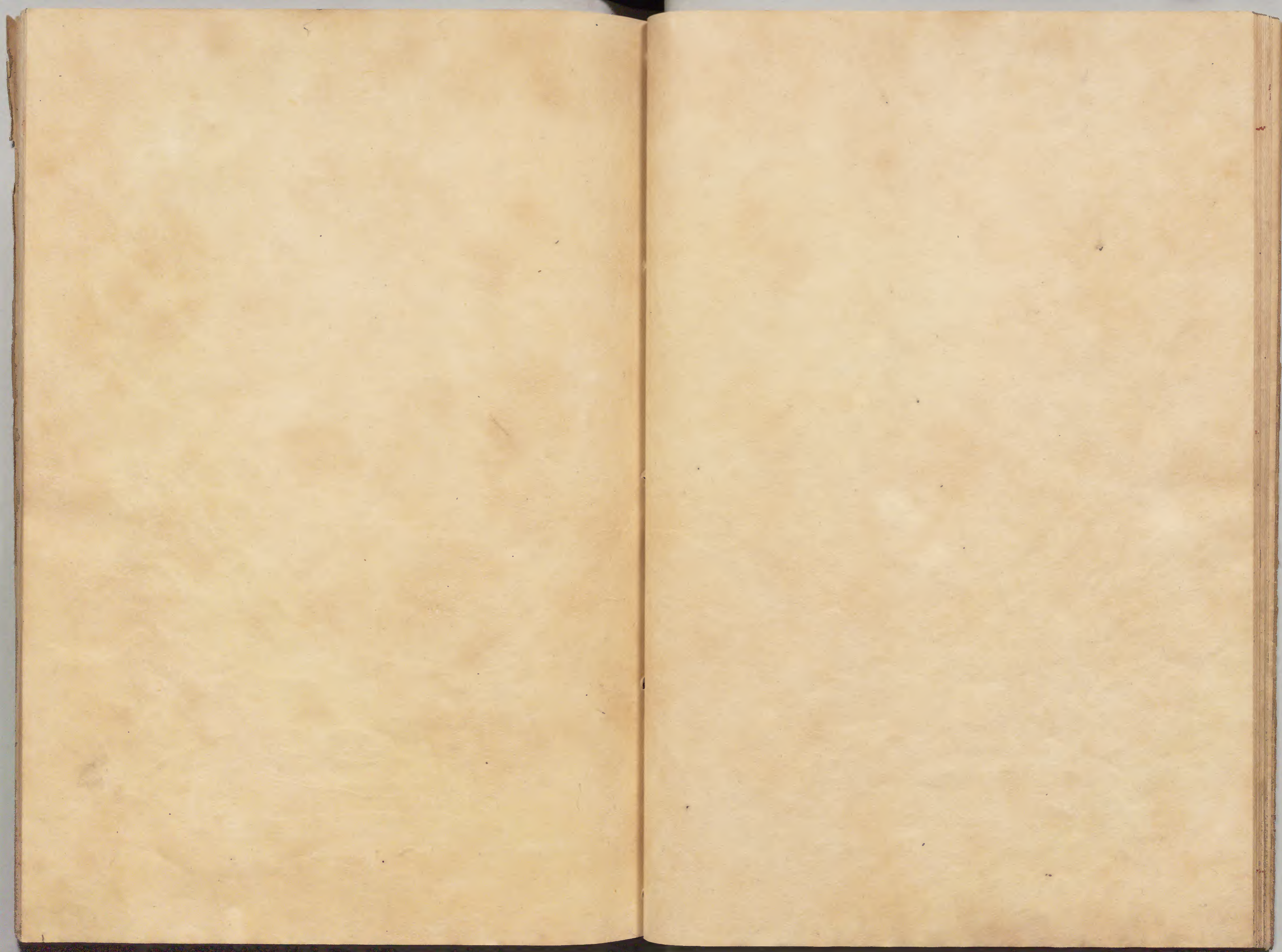
女子

いだの 内藤元澤守忠政が妻

女子

まつな 松平甲斐守輝綱が妻

いかにいかにいかにいかに
家紋左巴三頭



● 泰氏

ヤチノウヂ

足利宮内大輔

母ハ武藏守平泰時ガじと女

花房

ハナボシ

飛騨守鐵直いとのくまひとりはら林系はやしとら以て

稱号なづなとらと

義辨よしはん

上野津師うのづのし

泰氏やすし八男やちゅう

貞遠さだと

同三郎

頼遠よりと

同左郎

職通しやくみち

花房はなぶら五郎

常陸國ひろのくに花房はなぶら五郎ごらうにて

くわてはなぶらと号ごうす

正和しやうわ五年六月二十二日あち卒す

通治とうち

同五郎たののときらう 母はは平時則へいじのりがひとめ

正安しやうあん元年八月二日卒す

教信けうしん

同六郎どうろくらう 母はは上かみよ月つき一いち

法名ほふな圓清えんせい

女子むすめ

母はは 同前どうぜん

職兼しやくけん

同太即大吏

頼治よりぢ

同徳三郎どうとくさんじやう

頼重よりしげ

右馬みぎうま 臣おみ

兼治けんぢ

刑部けいぶ 少輔しょうぶ

頼泰よりやす

二郎

職重しやくぢゆう

久長ひさなが 清尉せいゑう

直重なおしげ

帯刀おびたぎ

職定しやくぢやう

太即たいじやく 右清みぎせい 門尉かどゑう

定勝 さだかつ

十郎左衛門尉

職忠 しやくちゆう

因幡守 いんぱんのかみ

忠邦 ちゆうぱう

治部左衛門尉 ぢぶのかみ

職治 しやくぢ

正定 しやうてい

五郎左衛門尉

六郎左衛門尉

大學頭 だいがうのかみ

生國御前 なまくにのみかみ

女子 むすめ

正幸 しやうきやう

又左衛門

戦後考 せんごのかみ

生國播列 なまくにのり

御田行長の世よありて後國公親の

時正幸御前いかにの國より海路とて上

海を播列室の付小豆嶋よおわて
 海賊等あまのこの船よおのりかまひ
 きててうらとめんとも正幸大膳殿の矢
 して賊徒の之がけと射えり其首
 と得たり賊徒等利とてうらひま
 正幸が若とときさじゆ後日よ賊徒其
 矢とみりてふ
 安長十年六月二十二日死と八十二歳

法名道悦

正成

志摩守 後任下 生國同前
 播列三本の城を別下小三郎長治
 正長よりし時秀若正成と長治が
 りとに流るるて長治と正長と
 和睦せしむ
 宇長多和泉守直家正長より属せん

事と云ふ小西攝津さるるびよ正成こ

まよとらかりて共よ正成と

他列三々落城の時正成はよよと

ひで首級と得たり

秀吉藝列毛利氏と征討のため備

困る松の城よとりて陣ととり不

日は攻落してとまりる松の城と

正成よたまりり六千石のか増ありて

八千石と領も其ほ又備前國よそ

二万石のか増とたまり共よよらカ

の番地二万三千石都合三万石と領も

襲撃の時秀吉の命よとりて

城よ下よ敷一列の足強よく

つれけり三十四年

文禄元年秀吉朝鮮征討の時正成

守森多秀家よ属して後海一漢南

人あまこころとれ正成とて敵

首級と得たり又朝鮮の切寄晋列

南門の三城よにわくわくあまのこの歌とら
切家とて祇とわくわく

長六年正成守長盛よとる
の勅氣とわくわくして共家とたらしめ

東照大権現増田右衛門尉長盛よとる
尋ところを移して正成と長盛が領地よ
とくめたふくろ石田治部少輔三成
謀叛とくわく長盛三成と同され
よ正成長盛が領地とくわくして野守

のりけ園が京合戦高岳三成伏誅のほ
大権現正成とわくわくして
の地よと六千石とたまわれ

長十九年大坂陣の時正成あまの
子幸次正盛侍なりと
をり仁和守切口よ出張して款兵と
追きりせげつわよゆめ清とくわく

元和九年二月八日死と六十九歳
法名宗悦

とてしれ

同十八年四月十二日死を六十歳

幸昌

源之助

生國武苑

寛永十八年七月四日父幸次を以て

とたまひり六ふ石と領也

心盛

勘右清門尉

生國傳前

安永四年七月長秀頼より領之りし

年一も領也してされ

同十九年

台座院殿と録しをそしり系

之和元年六月七日大坂陣の時總中

よ先たらて陣中よせあ入とんとしを

り落城ゆ首級と領也

大坂落居の援伏刀人の敵よにわて戦

功の甲しとたたえ給る時正感がこころざしと感懐ありて賞金とたまわれ

寛永三年

台座院殿の作よりりて御使番とされ

同八年上総國まで幕比千石とたまわれ

まわれ

台座院殿薨御の後

將軍家より侍之をたまわれ

同十年伊豆守の役とらけたまわれ

正堅

勘兵衛尉

寛永七年

台座院殿と誅一なりとを習とされ

同九年

將軍家より侍之をたまわれ武藏國を知行とされ

正榮

右馬助

生國備前

台座院殿より之を承てまわれ

文長十九年大坂陣より侍の

とよまき山伯存也忠後従下屬也

元和元年六月七日天王寺を過にた

りて流とありて軍切とてげまるとより

は見えめて其功の勝劣とたごさりの

時序靡美とて黄金とたまひりれ

こほりてきて其を承て承て

流とありて事と感とたまひり

上野國より千石の地と流

寛永九年

將軍家の作より侍使者となれ

同十年千石の流が増とたまひり

同十六年十月四日死と軍六

法名常和

宗勝

又七郎

生國武藏

寛永九年

將軍家と跡ついでにたてまつる計十三家

同十三年御書とつて

同十六年父正栄が世終よそひとなり

一千石と領りやうと

正信まさのぶ

助也すけよし

生國なまくに撰別せんべつ

元和四年

將軍家と跡ついでに

寛永九年上総國かごのくにと下総國しもとのくにと知約ちやくと相領あいにと

職勝しやくかつ

重吉ちゆうきち侍

職澄しやくすい

加吉かきち侍

職之しやくの

助吉すけきち侍

永祿八年他列院庄神埼合戦の時職之
敵とおうんで首級と得たり

同九年他列有巢島城の時城を以て英
次郎なるびよ敵一人とうちとけ

同年備中国日情の城を日情八郎左衛門
毛利よきしゆ毛利大軍といひてこれと

せじ八郎左衛門加勢と宇高多直家より
こふ直家家長二人よ命じて是よお

りしごとく成ほぐとせむと家臣等と

あやうきよりりて辞とれゆ職之おも

じん事とこふ直家これとゆれとすか

りら職之こよさうりて其城とまりり

毛利つわよ去よりてされ直家と勇

と感して備前国中豆利山に登波利

のこけ取とたまりれ

同十年備前南谷合戦の時職之小加茂

弾正と徳とあうとこをば杉軍功あり

同年備中国松川の陣とせじり時職之

之がけとあり

同十二年職之武略と以て備前國伊部の城を日笠源太と討捕

同年備前國支田合戦の時職之毛利が

兵徳田と四郎と一番と勝と合と

之能元年職之教度の軍功をよより

他列法軍の以となりて荒神山の城

ときついでこれよ居と

同二年他列肥田左馬助と徳田と

藤山の城と守り職之これと攻めし

肥田と徳とららと家

同三年小早川隆景他列佐賀山の城

と守り職之これと攻めしと敵あり

ららと家

天正元年同玉草薙氏硫黄山并取本

の三ヶ城と領と職之これと攻めしと家

人よと城とさしと心

同三年職之同玉久田西屋の城と攻めし

して城守とす

同六年直家掃別たりの竜野まらやに出法しほののとき

赤松あかまつ右左衛門陣うでざゑもんじんと湯山ゆやまより城之

これより引て敵かたあしこしよりとれ赤松

が兵へいとくくを敷ふきし

長他ながた園のりと三ツみつよりけて共とも一いつと直家ちか

たのらそと二ふたと毛利もうり有馬ありま以も禪ぜんえ支配しはいす

脚あし之の取とりての陣じんと攻せめし共とも路ぢ人ひとと味

亦また下した属ぞくせしめて園中のちう平均へいきんなり

同八年ちゅうはちねんの春はる直家ちか卒すまひと嫡男ちやくなん守基しゆき八郎はちらう

秀家ひでゆき 後のち中納言ちゆうなごんになねど 是法しほのほと行ゆぐれり

よりて脚之あし秀家ひでゆきに属ぞくし

同十一年ちゅうじゅういちねん毛利もうりが兵へい大軍たいぐんと引て沖おきの楯のすゐの

城しろまたてぶりれゆ脚之あし加勢かぜと秀家ひでゆき

より引て大兵たいへいと引て攻せめし是より

さき城之しろ所城しよじやうより居まゐり時敵ときかた兵へい中ちゆうより

より引るとも城之しろが兵へい龍波りゆうは又また市郎いちらう

表討うらたの先まへにけ兵へい津市郎つしちやうと討うち掃はらふ敵かた

とういふひくひき退く秀家又市郎が表
年として敵の將とうらう事と祿
て感状と又一郎は授く

文祿元年言藤陣の時漢南人あま

うりされ秀吉は軍功と感と其のら

秀吉の命より秀家の家をとり

て法事とほりされ黒田如水うけた

まわりあて御朱印とたまわれ

朝鮮より油納の后石田三成あつび

のでく けん おまひのうら

秀家の家人長弘に侍るも職と秀家

も終るゆゆ秀家の職と死罪よ

ちんとと死せども秀吉よつげとして

これとあこまゆりあさばされより三成

又秀吉よりした秀吉これとあられい

たすひく共死罪とあさめて我職之と

あづらぐいとれいひく同三年秀吉

依竹義宣よ職之とあづけく常陸國

りおひじりし武列とされ時

東照大権現秀吉の職之とありし事と

きこりて職之が男子一人と記すよ

めとく^{なま}のじゆ 釣命より職直九条

小なりしと武列池とよすてを

そ又長五年上松景勝謀叛の時

大権現下野圃小山陣と法たふとき

職之と小山よりてお湯と別 作と

けたまりり御使とて依竹よありむ

き人質とあさじ

同年石田三成と方と謀叛とくはら

宇吉多秀家これよくみと

大権現陣と法より職之御之も(夜向

と三成伏誅の役職之御使とて

園原より備前圃よありむ(是山の城

と受けとりて秀家領圃の事とく

同年備中の内よたわく(赤比とたつ

同十九多大坂陣の時野圃福清よせめ

りりて仙波よ陣とく

元和元年大坂再亂の時ハ疾やまひよりりて
出陣まわりのせし

日三年二月十一日死しと 六十九むそ歳
法名道惠りやうだうゑ

勝元かつもと

与左衛門

職則しやくじやく

小郎左衛門尉

孝文長五年江戸よりわろ

大権現おほいけんと名な一いつきとてまつり

同年職之使前國よりゆきしきん山やまの城

と受けし職則曰いひなり

同十九年大坂陣の時職則のうみふて

新あらた家けより陣まと十一月二十九日新家より

野田福徳のだふくとくより京きやうよりりて平野ひらのよりわろ

首級くびかきと

右衛門院殿より執とトけしは是こゝろと感かんトたまふ

十二月二日仙波^{せんば}陣とぞられ

元和元年大坂^{おさか}身^み礼^{れい}の時職^{しやく}則^{すなは}虎^{とら}崎^{さき}の陣

番^{ばん}とてむむ月七日落^{おち}城^{じやう}の時虎^{とら}崎^{さき}よ

つらら出てあまこの敵^{てんき}去^さとららとら

大指^{おほさし}現^{げん}薨^{そう}陣^{じん}の候^{こう}駿^{しゆん}府^ふより江戸^{えど}よりつりて

台^{たい}座^ざ院^{いん}殿^{でん}より決^{けつ}之^のとてまつれ

日^ひ六年十一月二十七日死^しと四十一^{しよじゅういち}歳

法^{ほふ}名^な玄^{げん}長^{ちやう}

職^{しやく}利^り

五^ご郎^{らう}左^さ衛^ゑ門^{もん}

元和^{げんわ}六年十二月十三^{じふさん}日^ひ始^{はじめ}て

台^{たい}座^ざ院^{いん}殿^{でん}とを^を一^{いつ}キ^きとてまつれ

父^{ちち}職^{しやく}則^{すなは}死^しして候^{こう}家^け督^{とく}とてし

台^{たい}座^ざ院^{いん}殿^{でん}薨^{そう}陣^{じん}の候^{こう}

将^{しやう}軍^{ぐん}家^けよは之^のを^をまつれ

職政

平左衛門

寛永十三年四月始て

將軍家より之を奉りて

職直

林原左衛門佐

飛騨守

安永元年林原式部大輔康政より

つぎを奉りて

大指現とありて奉りて

約命より

花房とありて奉りて林原と稱し

同三年

台座院殿より之を奉りて

同五年上杉景勝謀叛の時

台座院殿奥列へ侍役向ひて職直供奉

列を奉りて石田三成乱とあり

より職直

台座院殿より之を奉りて大坂より

いづれ

同十九日の冬大坂陣の時付奉り

十一月二十九日職之職別野田福清と

せめとれ翌日

台榭院殿の命より職直とち地とせられ

元和元年大坂落城の別記中よき

だらで城中よせめ合ふとも歎とて

よ敷わらりゆく軍切とまざる

寛永九年

將軍家の命より頃位下よ叙一飛原也

いづれ

同十一年より十四年よいづら中て職直

上使として長崎よ下向一吳園の高松

耶穌禁制の事と沙汰と

同年十一月肥前諸系よて耶穌一揆と

おこし時板倉内膳正重昌石貝十花貞清

征討の沙使とかりて諸系よ殺向と長崎

ハ元來耶穌の軍たはり地なり其耶穌

よらみせん事とおらんむありて職直長橋
におのじよそこれと削せんとのうごころふ
別津許密ありて作ありきねハ長橋の
法氏一揆よらこころりあわハき花
左近将監者馬玄番頭が去とつてこれと
証得とて一あ 約命とらけたまわり
て職直江戸と夜と時よ嫡子左衛門依
職任 廿一十七歳 職直よつげどして十二月
十五日さきだらうて江戸と夜と職直も

又同日よ江戸と出て尾列熱田とて職任
よゆきあひてそれより父子おとりにせ
向ふ十二月二日長橋よつね時よ橋原の
一揆いよく蜂起して天草これよらみと
船とくども長橋ハわのて共流と林おど
ふゆ一揆よ愈どねのうれし一き花
左近将監者馬玄番頭と去とつけて
長橋と監固と職直子職任橋原
おのじよ一揆すてよら馬原の城よとて

おりに聖之(よ)正月元日(ま)瑞鴻(ま)信濃(ま)松倉(ま)
長門守(ま)立花(ま)友(ま)を(ま)お(ま)監(ま)する(ま)馬(ま)兵(ま)部(ま)少(ま)輔(ま)と
勢(ま)合(ま)て(ま)三(ま)万(ま)餘(ま)と(ま)て(ま)京(ま)の(ま)城(ま)と(ま)せ(ま)じ(ま)と(ま)ど
も(ま)利(ま)と(ま)均(ま)ど(ま)し(ま)て(ま)庇(ま)と(ま)か(ま)り(ま)討(ま)死(ま)と(ま)り
りの(ま)ふ(ま)り(ま)ぶ(ま)た(ま)は(ま)一(ま)板(ま)倉(ま)内(ま)膳(ま)正(ま)討(ま)死(ま)
石(ま)貝(ま)十(ま)花(ま)庇(ま)と(ま)り(ま)ふ(ま)た(ま)は(ま)同(ま)月(ま)六(ま)日(ま)上(ま)使(ま)
松(ま)平(ま)伊(ま)豆(ま)守(ま)信(ま)綱(ま)戸(ま)田(ま)友(ま)門(ま)氏(ま)秩(ま)沙(ま)横(ま)
目(ま)井(ま)上(ま)範(ま)后(ま)守(ま)政(ま)重(ま)有(ま)馬(ま)の(ま)原(ま)よ(ま)到(ま)
恙(ま)と(ま)し(ま)や(ま)法(ま)方(ま)り(ま)馳(ま)あ(ま)つ(ま)れ(ま)去(ま)

十(ま)万(ま)餘(ま)同(ま)月(ま)六(ま)日(ま)り(ま)二(ま)月(ま)二(ま)十(ま)七(ま)日(ま)よ(ま)り(ま)
ま(ま)て(ま)は(ま)寄(ま)折(ま)衆(ま)と(ま)つ(ま)け(ま)て(ま)これ(ま)と(ま)せ(ま)じ(ま)や
い(ま)ど(ま)も(ま)つ(ま)あ(ま)よ(ま)そ(ま)利(ま)と(ま)得(ま)ど(ま)これ(ま)よ(ま)り(ま)て
ま(ま)と(ま)使(ま)法(ま)軍(ま)よ(ま)志(ま)め(ま)し(ま)て(ま)い(ま)ろ(ま)く(ま)法(ま)年(ま)お
と(ま)心(ま)と(ま)同(ま)く(ま)一(ま)力(ま)と(ま)あ(ま)ら(ま)せ(ま)て(ま)これ(ま)と(ま)せ(ま)じ
同(ま)一(ま)二(ま)十(ま)八(ま)日(ま)と(ま)以(ま)て(ま)そ(ま)初(ま)と(ま)と(ま)け(ま)し(ま)職(ま)直
と(ま)瑞(ま)鴻(ま)信(ま)濃(ま)守(ま)勝(ま)茂(ま)が(ま)う(ま)あ(ま)よ(ま)を(ま)ま(ま)て(ま)其
去(ま)と(ま)下(ま)知(ま)せ(ま)し(ま)二(ま)十(ま)七(ま)日(ま)職(ま)信(ま)城(ま)中(ま)り(ま)
兵(ま)の(ま)も(ま)し(ま)と(ま)出(ま)んと(ま)も(ま)れ(ま)あ(ま)り(ま)し(ま)と(ま)し(ま)て

一番は城中へ入りこみ城とて討家へあり
ひらり死し又も疵とけりありのたは
職直又つひて入る鴻徳が兵とて
まのく士卒又死し疵づりのたは
城中三万竹の兵命とおもまどをさ
殺ふ死りとどども職直父子あはびよ家
人生とりとれ死とわらんとて歎あは
と討と家ゆへ一揆つわたり敗をも職直
ありよ家てさし物とてりて法よの軍坊

とまのこは城中の家とやきて火のよと
あげ法軍よしめと法軍より燗とえ
て同討よ城中よせあ入翌日とてくを
邪徒とわらがり城とけあれあ上使職直
父子が約とてうじひてつと城よさきだちて城
よ入事といふれまはあ上使はるよあり
て職直父子が軍法ようじく事と言と
將軍家降氣名ころようすして鴻徳か
らびよ職直とめとにり六月十九日江戸

よしとれそは奉行取よおわて二日會議
ありとんども職直がやま始後一なり

同日二十九日井伊掃部頭直孝と井大炊以
利勝堀田加賀守正盛と酒井濱坂と忠勝
が宅よ會して 約命と鶴橋信徳也

よつげていそく左清門依一番よ城小のり
こそく職直下知とくつとんども信濃也
多珠よそ思通ありべきのまよ法軍よ
志めあをせどして城中にせめ入ちつみ

ありと志づく出はよやじべと又職直よ
つげていそく敵城中と出づられそより
職直父子と知と中もことごとくして法軍よ
えだらし城中よせめ入軍法とそしり乃
糸其飛くありとあり門戸とそらつて飛
居とべと七月朔日徳圃の大小名出は
の時敵中よおわく執事此老中 約余
乃越とのべて勝義ありびよ職直職信が
飛の煙とと法人よりきつじ職直所

劫氣とわらうとひとと
約命のあて
しきと伝へたてまつれ

同年正月二十九日勝茂津教免のうら

日十七年五月十一日阿部對馬守重次宅

よためて老中 約命の旨とつけてい

くく一人を罷とおこりしといども

東照大指廻二十六年きよあり共之軍

功ありゆへに罷といひしと職直こそこ

ら病よつれといひども父子おもに重次

毫よつりて 約命のつりけなき

事とあると日月十三日職信中城と職直

と疾のいゆれとつて七月三日中城と

職信

左衛門佐

寛永四年七条にて

右衛門殿より津 月見

同八年

將軍家とありてきたまつね

十四年鴻原那蘇輝起の時先陣よ

とく見一番よ城中よせめ入る事ハ職直が

譜中よ見くしり

職負

右馬助

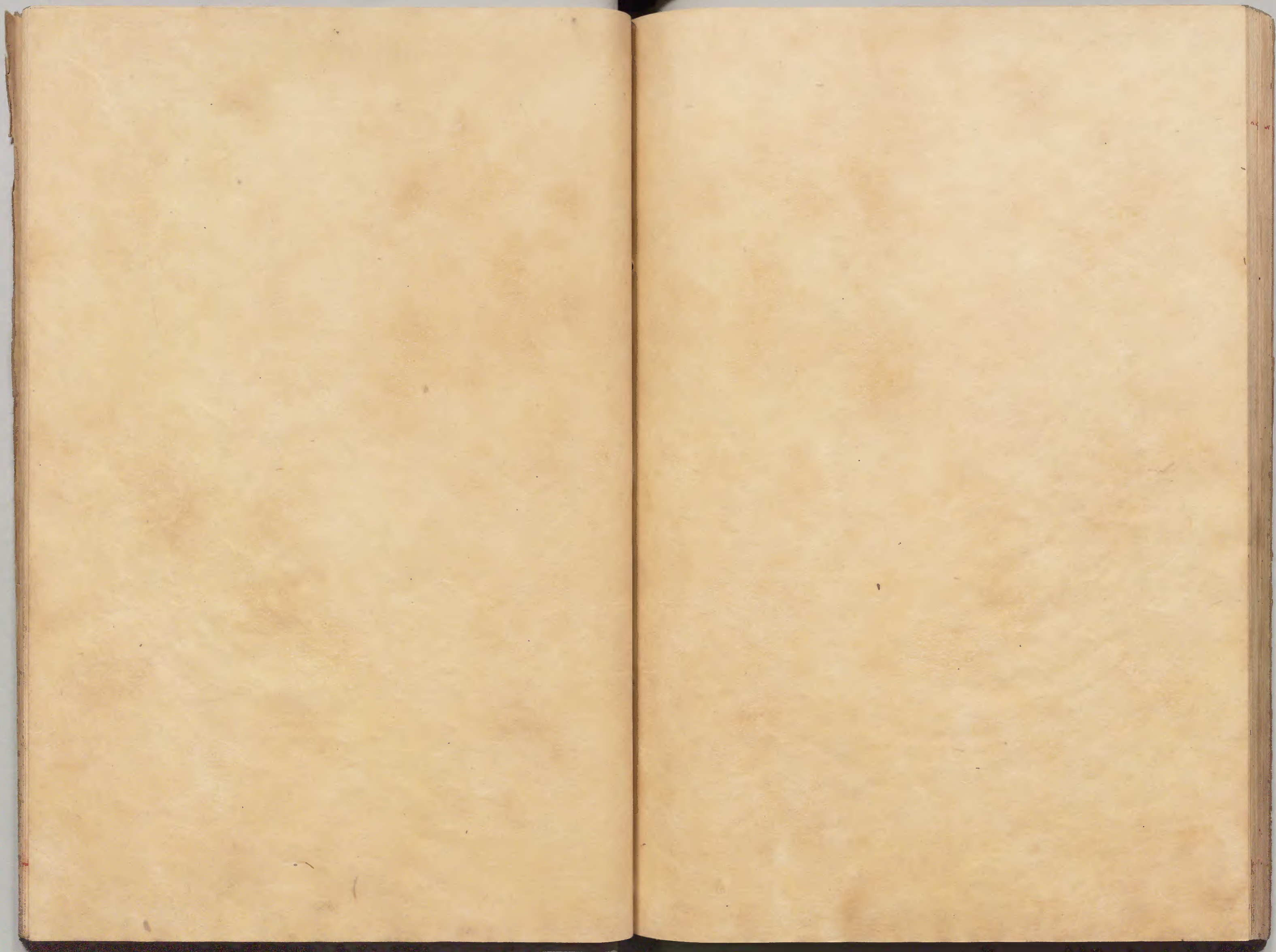
寛永十三年

將軍家とありてきたまつねよ十三日

家紋三盾令

職直ハ楯原と称するよよりて車の

紋とありて



荒河あらか

● 重詮しげあき

小右衛門こゑもん

生國尾別いけくにびり

佐久右衛門さくゑもん 信盛のぶなり 尾別おびり 六む 黒くろ 下した

松まつ 丸まる 死し 也なり

法名ほふな 嘉彦かひこ

重世

童名作

長兵衛

幼少の時小姓となり、藏田常吉よほて
尾列井口と知行と

東照大権現園東津入園におりし出され
武列の内よわけて領地と給ふ

享文長四年

名蓮院殿とありキキマツリ大御者の紐

領とおほせつけられ其時上総下総兩國

の内よわけて加増乃領地と給領と

同十四年 約命により城別伏見城

御書とつし其御書とて

名蓮院殿武列の内よわけて領地と加増し

たふし都合八百六十石給ふ領と

同十九年大坂陣の時伏見城津島と

つしは時 約命より大和よおしき

津島をわたりたふし城は存大坂へふ

之^レ和^ノ六年^ノ五月^ノ八日^ノ病^ニ死^ス五^十六^歳

重勝 しげかつ

長兵衛尉 ちやうへいゑいのじ

生國氏^ノ別 なまくにのべ

台座院殿へ^レ侍^ルへ^レ侍^ルまつる

重政 しげまさ

七兵衛尉

生國^ノ同^ノ前 なまくにのまへ

之^レ和^ノ四年^ノ九月^ノ十日

將軍家^ノと^ルお^シ侍^ルへ^レ侍^ルまつる

重照 しげてる

勝十郎

生國^ノ同^ノ前

之^レ和^ノ九年^ノ十一月^ノ八日

將軍家へ^レ侍^ルへ^レ侍^ルまつる

寛永^ノ五年

約^シ命^ニによりて^レ小^十人^組

頭^トなり

重頼 しげたか

侍^ル兵^衛

寛永^ノ九年^ノ八月^ノ二十^三日

將軍家へはくしそまらぬ

重正 しげまさ

万子代 まんぢよ

生國武列

領地八百五十條石 りやうぢ ちひやうじ

家紋割鷹羽 けのこ たりのし

荒河あらか

某なにか

忠告ちゅうこ

生國尾列なまくにびり

園白秀うゑしろ者ものよよははくくへへてて使つかふふととななりり

忠告ちゅうこ

又六郎またむろ

生國同前なまくにどまへ

大指現へはくしそまつれ

天正十八年小田原陣の時付を

同十九年奥列陣の時付を

文禄元年高藤陣の時

大指現よあつぐひをそまつり肥前名護屋よ

いづれもなほ

右衛院殿へはくしそまつり

安永六年志田陣の時奉

大坂あ度の陣の時奉し津旗本よ

すあひ鉄炮のあつれと何づら後を

まとなほ

元和元年五月七日の津合戦の時

約命よよりて忠告鉄炮は押しつれて

川とこへ二町かた出法し下知とあつ

といへどもあつれと押しつれてあつ

つき土井大炊頭利勝久世三田郎坂部

三十郎等よよりて先陣よすし

敵の首一ツ討捕右の三人よよりしこと

り其首と捨て又先陣よすむ
寛永六年四月二十一日六十二歳とて死む
法名普照

普光

又六郎

生國武別

元和六年

名徳院殿と名にそまうりそむ

將軍家へ所へそまうり

家紋丸の内よ割意羽

